原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第九十五号

写真上は、中西文子さんの亡夫の酉幸さん。地域分会の団結集会の席で、この通り飲みつぷりを披露。左は、久びさにたずねてきた、アソニツト工場に仂く同じ遺族仲間の岩谷フミ子さんと、すつかりうちとけての語らい。何の話かな？

原告団レポート

遺族――中西文子さん

怒りの火の燃える限りは――

はるかに続く闘いの道

亡夫の思い出抱きながら

ことの発生

冬の日が落ちるのは早い。ことを聞いて、中西文子さんが三池労組の三川支部（いまの三川指導部）に自転車でかけつけたときあたりはとっぷりと暮れていた。

三川鉱大爆発の日のことで、かけつけたのは三池労組の組合員の主婦ばかり、たしか五、六人づれだったように記憶している。

文子さんは当時、いまと同じ荒尾市万田社宅通町十八棟に住んでいたが、三川町通りにでたとたんびっくり仰天。同じようにかけつけてきた人びとでごった返し、三川鉱のまわりを騒然とした空気がすっぽりと包みこんでいたから。

ただならぬ様子によほど肝をつぶしたか、つれのなかの一人の主婦がいった――「もう帰ろう」。

「ここまで何ばしにきたつな。父ちゃんたちの生死もたしかめんで帰るとは、何な」

文子さんはいきなりどなった。が、それは「むしろ自分自身をはげました」のでもあったのだ。

三川支部にこそたどりついたものの、とても支部のなかなどでじっとしている気はせず、出たりはいったり……。

そのうちぱったりと、いま三川鉱の坑底からはい上がってきたばかりの、顔見知りの組合員に出会った。出会うなり、文子さんはたて続けに聞いた。

「お父さんを知らんですか。坑内はどげんなっとるですか」

「ご主人のことを知るも何も。もう坑内はめちゃくちゃ。みんな折り重なって死んどる。わしは息を吹き返したおかげで死体の下からはいだし、ズラーッと並んだ死体の列を踏み越え踏みこえあがってきたが」

文子さんの全身から、いっぺんに血がひいていった。

何の消息も

翌十日、もう昼近くになっていた。文子さんは三川支部と、三井天領病院の間をあっちにいきこっちにいきしながら、一夜を明かした。でも夫、中西酉幸さんのおとずれはなかった。

どう欲目に見ても、もう夫が坑底のどこかで息絶えていることを覚悟せずにはすまなかった。

文子さんは、心を決して家へ。

それは、夫の酉幸さんが四十二歳で、文子さんが三十四歳。結婚後十三年目（昭和二十五年八月六日結婚）のことだったのである。

三人の子どもがあった。男の子ばかりで、長男の隆幸さんがそのとき小学校六年生（十二歳）、次男の正博さんが同じく四年生（十歳）、三男の鋼治さんが同じ二年生（七歳）だった。

文子さんは社宅の家に帰るやいなや、これらの三人の子どもたちを呼び、自分の膝前に座らせながら告げた。

「ここにひざまずいて座らんねそして、母さんがいうことをよーく聞かんね。いま三川鉱には、もの凄い事故が起きていて、何百人という人が亡くなっとりなはる。お父さんも、恐らくダメだろう。これからは、この親子四人で生きていかなければならない。仲よく生きていこうね。

母さんはこうして、あんたたちを迎えにきた。たとえ亡くなっていても、お父さんはいっときも早くおまえたちに会いたかろう。だから、これから組合の三川支部に四人でいって、お父さんの死体があがったら一分でも早くかけつけて会ってあげようね。さ、お迎えにいくよ」

呆然として

夫、酉幸さんの死の便りが文子さんのもとへ届いたのは、もう十日の午後三時過ぎ。

三池労組のニュースカー"はたかぜ"で家族四人は、そのとき遺体安置所にかわっていた三井の体育館へつれていかれた。

一歩なかへ足を踏み入れたとたん、文子さんは気をのまれてしまい、その場に釘づけされたように体がこわばって動けなかった。あの広い体育館の内部を埋めつくして、はるか向うの方まで幾列もズラーッと並んだお棺が、揺らぐローソクの灯で薄明るく照らしだされていた風景――。

いまは完全に呆けてしまった文子さん、ただ係員に導かれるままにとある一つのお棺の前に。

蓋が開けられた。一瞬、「お父ちゃーん」と呼びかけると同時にワッと泣きだす子どもたち。

不思議なことがあるもので、そのとき文子さんの胸のどこにも悲しい思いなど湧かず、涙もでなかった。ただ呆然と眺める酉幸さんの死に顔が、ほんのりと桜いろに染まって美しかったことだけが、頭のどこかにいまも強く焼きついているという。

あわただしいなかに野辺のおくりがすむと、それからは、文子さんは魂の抜け殻のようにして日をおくったのだったが……。

開けた道

世のなかを思いつめてしまった文子さん。ある日のこと、子どもたちに向かっていった――「みんなで、父さんのところへいこうか」。真実、その道しかないものとばかり思われたからだった。

そんな文子さんに対して、長男の隆幸さんがきっぱりいった。

「父さんのところへいくというのは、死ぬこつじゃろが。それより、元気ばださんな母さん」

それが、小学六年という幼い子どもの言葉だった。「まるで大きな金槌で、頭のてっぺんに思いっきり一撃を食らった気持でした」と文子さんはそのときの隆幸さんの言葉を述懐するが、その言葉こそが、そのときの文子さんにとってただ一つの救いの手となったのであった。

「お父さんが余りにも早死にさしたけん、よーし、その分まで長生きして、何がなんでも三井に対する恨みだけはらさなければ」

この決意が彼女の胸のなかで固まったのは、それからだった。

亡夫のこと

いうまでもなく文子さんは、三池大災害裁判の原告の一人。あれ以来、荒尾アソニット工場（遺族の生活対策のために、のふれこみで誘致された企業）に検品係として働きながら、闘い続けている。先ごろもらった先月ひとつき分の賃金が、出勤日数こそ二十一日だったとはいえ、五回も残業しながら、手取りでわずか六万二千円。それもこの春、賃上げが実施された後のことだから恐れ入る。

おかげで三人の子どもたちが成長を遂げてくれ、いまは母親のもとを離れてそれぞれの道を歩いている。そのため彼女はいま、たったひとりのわび住まい。

しぜん思い出されてくるのが亡夫、酉幸さんのありし日のこと。

酉幸さんは常にわが道ひと筋に歩くいっこく者だった。「もっこす」という言葉がピタリと当てはまる人で、自分がいったんこうときめたら、人が左といえば右、右といえば左をむくというふうで、それがきっとあの三池闘争を闘い抜かせた根源のものだったかも知れない。

酒豪としても名を売っていた。「女房と酒のどっちをとるかといえば、もちろん俺は酒をとる」……などと冗談を飛ばした彼。

町の、そこかしこの飲み屋に借りもできた。それも、やりくりに人一倍才覚のよい女房が必ず払いにまわってくれる……、そんな自信があったものらしい。「事実、私はお父さんのうしろを追っかけるようにして、払ってまわりました」、と文子さん。

道はるか

酉幸さんは、一つの趣味をもっていた。錦鯉の飼育。近くの養魚場から稚魚を買ってきては泉水に入れ、まるで子どものように可愛がりながら育てていた。

そのこともあって、毎朝四時過ぎにはこっそり寝床を抜けだし、汚い下水の流れのなかに繁殖するあの赤ミミズ取り。それを水できれいにいちいち洗ってから、鯉に与えていた。そのため、鯉たちは飼い主の酉幸さんにすっかりなじんでしまい、差しだせば、鯉たちは彼の手のひらに乗ってきてたわむれていたという。

その日も、毎朝の例と少しも変らず、泉水の鯉たちに好きな赤ミミズの餌を与えた後、二番方に出勤していったのだったが……。

どもあれ、酒がはいっていないときの酉幸さんはといえば、うって変ったようによき夫、よき父親だった。家のことはいっさい酉幸さんの受け持ち。

「私はお父さんに十三年間添いましたけど、お父さんが朝起き出すところを見たことはほとんどありませんでした。いつも、気づいたときにはもうとっくの昔起きているのでしたから。起こしてくれればよかったとに、といえば、寝ぼすけのお前だけん、一分間でも長く寝せとこうと思うたった、とこんなぐあいでした」、とのこと。毎朝のことながら、文子さんが起き出る頃にはきまって、七輪の二つや三つにはもうカンカンと火が燃えていたものである。

あげれば際限のない夫の思い出を胸に、ときには迫りくる孤独感に心をよじらせながらも、三池の遺族の一人――中西文子さんは懸命に生きている。同じ運命の紐で固く結ばれた多くの遺族の仲間もいる。怒りの火燃える限り、彼女の前には、生涯の果てまでもはるかに続く闘いの道がある。がんばって、中西文子さん。